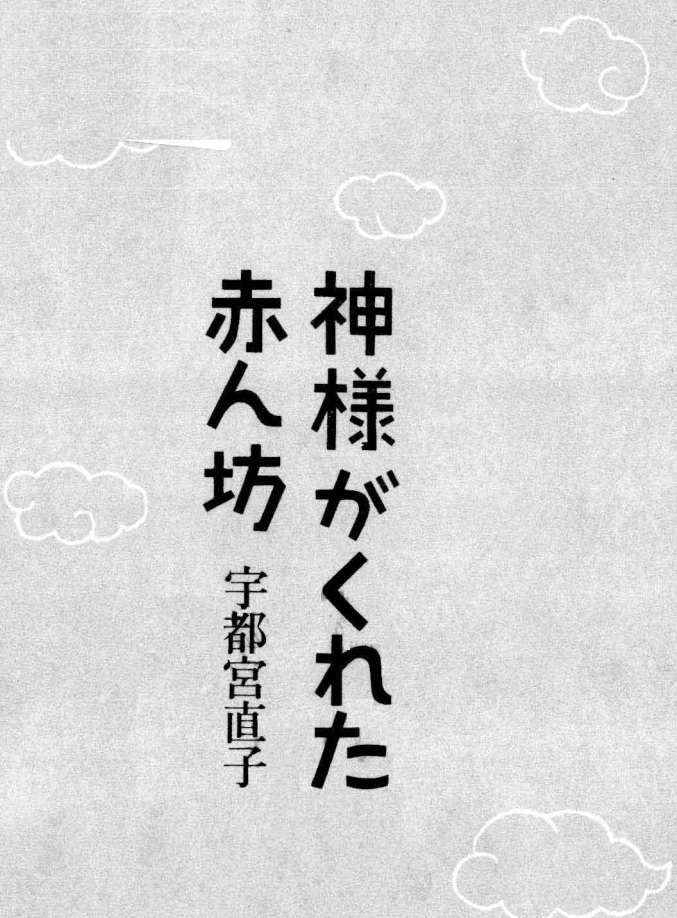


神様がくれた 赤ん坊

宇都宮直子



The background of the cover is a light gray with a subtle, repeating pattern of stylized clouds. The clouds are simple line drawings with soft, rounded edges, scattered across the page.

神様がくれた 赤ん坊

宇都宮直子

神様がくれた赤ん坊

一九九一年九月二十四日 第一刷発行

著者——宇都宮直子

© Naoko Utsumiya 1991,
Printed in Japan

定価——一〇〇〇円（本体九七一円）



発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二二 郵便番号 一〇二―〇一

電話 編集部 〇三―五九五―五五三

販売部 〇三―五九五―六三三

製作部 〇三―五九五―六六五

印刷所——慶昌堂印刷株式会社

製本所——黒柳製本株式会社

乱丁本・落丁本は小社書籍製作部にてお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本に
ついてのお問い合わせは学芸図書第二出版部にてお願いいたします。

ISBN4-06-205614-3 (※2)

神様がくれた赤ん坊

………目次

事	幸	妊	治	流	檢	不	失	誕
故	福	娠	療	產	查	妊	意	生
.....								
七五	六九	五四	四九	四二	二七	一六	一一	五

出 産……………八五

不 安……………九五

母 乳……………一〇九

告 知……………二〇

出 発……………一三五

茉莉子……………一五六

あとかぎ……………一六二

装幀……木下勝弘

寺尾歌子

誕生

暗い。

不安が夜の闇をますます濃くしている。時計の音がする。ただそれだけ。陣痛室には他に何も無い。倉庫みたいだと北原知子は思った。

午前零時を少し過ぎた頃に病室で破水をして、ストレッチャーでこの部屋に運ばれてきた。陣痛がまだそれほどひどくないので、ふうつと眠りに引きずりこまれては痛みに呼び戻される。さっき運んでくれた看護婦は、子宮口が四・五センチしか開いていないと言った。

「まだまだだから、眠れそうだったら眠りなさい」

いよいよ、これから自分が初めての子供を産むのだ。待ちわびた子。心の底から欲しかった子。それなのにどうだろう。不思議なほどに感動がない。ただ痛くて、息苦しく

て、疲れている。

午前三時、ウトウトしていた身体に、突然巨大な痛みがドンときた。今までに知らなかった有無を言わせない痛み。それからの一時間はまさに産みの苦しみて、母親学級で教わった呼吸法などどこかへ飛んでゆき、それどころか息が吸えない。

看護婦が入ってきて言った。

「初産だからねえ、子宮口が開くまでが大変なのよ。まだ、いきんじやダメですよ」
担当の女医と産婦人科の医師が別に急いだ様子もなく静かに入ってきた。知子は、自分はまだ死ぬのだと思っていた。そのくらい苦しかった。

「先生、私、もう産めません。助けてください」

女医はひどく冷たく、

「グダグダ言いなさんな。あんたが産まないで誰があんたの子を産むの」
と言った。

一回目の内診で子宮口はようやく八センチ開いて、知子は分娩室へ移される。頭の中で「あんたの子」という言葉がエコーのように響いてくる。誰の声か分からない。グツとお腹に収縮がくるたび、いきみたくなる。ここでいきめたらどんなに楽だろう。知子

は天井を睨みつけた。陣痛は激しく強く情け容赦なく、次々にやってくる。そのたびに、天井は上がったり下がったりした。

二度目の内診。

「よし、十センチだね。北原さん、次からいきみますよ」

陣痛がくる。うーんといきむ。やはりこらえるよりは楽だった。医師が、知子の身体
の横に立ち両手で腹を押し始めた。

「あと何回で産まれますか」

「もうすぐよ」

女医が「会陰^{えいん}を切ります」と言つて注射をし、メスで切った。肛門と膣の間への注射は普通だったら痛いだろうに、陣痛の痛みに飲み込まれて、いつ注射されたのかさえ分からなかった。

陣痛発作の五回目。

「えっ、えっ、ええーい」

と泣き声がした。羊水がざーっと流れる。ああ、産まれたなあ、どうせなら「オギャー、オギャー」と泣いてくれればいいのに。知子は、赤ん坊を見ようと少し上体を起こ

した。

看護婦がスーッと子供を隠すように離れる。見えたのは髪の毛が黒々とふさふさしていたところだけ。誰も「おめでとう」と言ってくれなかった。それどころか、男か女かさえも知らされない。

「あのう、その子、男ですか、女ですか」

「ああ、女の子です」

知子のいる分娩台からは見えないが、医師たちも看護婦もバタバタと忙しい。どうしたんだろう。子供も弱々しく第一声をあげてから泣かない。

「すみません。その子、死ぬんでしょうか……」

聞いてみてから胸がドキツとする。まるで、そんなことは思ってもみなかったのに、どうしてこんなことを言うのだろう。死ぬなんてことあるわけがないのに。看護婦は少しもこちらを見ずに、

「だいじょうぶです。今、羊水を吸い出していますから」

と言った。

ほら、やっぱり、だいじょうぶだった。きっと、羊水でも飲んだんだ。知子は、それ

から産後の処置を受け、点滴をしながら分娩室で二時間ほど眠った。

目が覚めたとき、非常にすっきりした気分だった。あの痛みが身体のあちこちに跡を残していたけれど、平気だった。

「そうか、女の子だったんだ」

小さく言ってみる。嬉しかった。ただ、妊娠する前に思っていた、「きっと感動で泣くだろう」「幸せでたまらないだろう」とは少し違っていた。子供を見せてもらっていないからだろうか。それともまだお産の直後で疲れているからだろうか。

ストレッチャーに乗って自室に戻る時に、看護婦に頼む。

「子供、見せてください」

「見ないほうがいいよ。ショック受けるから」

「どうして」

「クベス（保育器）に入っているから」

「クベス？ 私も未熟児でだいぶ長いこと入っていたから、そんなことでショックなんか受けません」

後から考えれば、この時はなんて幸せだったんだろうと知子は思う。ストレッチャー

で運ばれながら、わずかに開けられたドア越しに見た子供はやはり頭しか見えなかった。それもほんの少しで、看護婦はドアを閉め、ストレッチャーを押した。部屋のベッドの上で一番先に思ったのは、やはり顔が見たいなあで、その他には何も思い浮かばなかった。

平成二年五月三十日

命名 北原 茉莉子

われの血継ぐ孫の生^あれたり明日もまた

その明日も森よ青々と在れ

祖父 中富 陽介

失意

昭和六十三年六月二十八日。

川崎市にあるS大病院の産婦人科で、北原知子（二十六歳）は両脇を、膨らんだお腹に似つかわしく丸々と太った妊婦にはさまれて名前を呼ばれるのを待っていた。長身で痛々しいくらいに細い身体のぺちゃんこのお腹を愛し^{いと}そうに手のひらでなでながら。

「そう言えば、なんとなくムカついている」

「そう言えば、妙に眠たい」

「そう言えば、梅ぼしばかり食べている」

そんな、いくつかの「そう言えば」を数えて彼女は病院へやってきた。

夫、北原達彦（二十八歳）は彼の特徴でもあるボーカルフエイスを崩さずに、「そんなこと、俺はいつもだ」と言った。二日酔なんかと一緒にしないでよと心の中で思う。

それに知子の確信を支える強い味方があった。きれいに高温がつづいた基礎体温表である。

知子はこの二週間というもの、毎朝祈るような気持ちで婦人体温計をくわえた。口から体温計を抜く時には、「えいっ」と気合いを入れる。夫にはうるさいと不評だったし、安静かつ安静に計るべしとされている基礎体温ではあるが、結婚二年半にして、ようやく訪れた機会をなんとか本物にしたかった。

「えいっ」

「ああもう、うるさい」

繰り返すこと二十二日目の朝だった。

二人の住んでいるマンションから病院まで電車で一駅二分。自転車でも十分もかからない。それを知子はこの日、マンションの真ん前から出ているバスを使って出かけた。バスはかなりの大回りで、止まる回数も多く十分以上かかるし、駅前にしか止まらないから、そこから病院まで多少は歩く。あまり上等な手段ではない。それでも知子は、どうせこれからはつわりでキツくなるだろうし、バスだって一度乗ってみたほうがいいわ、と考えていた。

「北原さん」

受付の年配の女性の妙にしわがれた声がする。

「どうしました」

「生理が止まったので」

医師はごく普通の顔をしていたし、産婦人科では当たり前の会話が少し恥ずかしい。頬も心なしか熱い。

「体温表は持ってきていますか。あつたら見せてください」

果たして医師は、知子の差し出した表をほんのちよつと見て、本当にちらりと見ただけ、

「ああ、これは妊娠していますね」

と言った。あまり簡単な言い方だったので知子は肩すかしを食ったような気にさえる。医師は検査票を取り出して、パターン、ポットとゴム印をいくつか押して言った。

「はい、いちおう尿検査します。尿を採って、呼ばれるまで待っててください」

八時半のバスに乗り、一時間と少し待たされて、胸の高鳴るような不安に身体が沈みそうな思いをした診察は三分もあつたらうか。医師は知子の顔も見なかった。

尿検査の結果もずいぶんと待つことになった。知子の前に、「不妊について」というポスターが貼ってある。

「結婚後、正常な夫婦生活があるにもかかわらず、二年たっても妊娠の成立を見ない場合、これを不妊と言います。ご相談下さい」

危なかったなあと思つた。そして、不妊の相談をせずに済んだことを喜んだ。しわがれ声にまた呼ばれて診察室に入ると、医師は看護婦から渡された用紙を見て、それから、今度はゆっくりと基礎体温表を見て声をあげた。

「これで、マイナスだって？ 変だなあ。おかしいなあ」

「あのう……どうしたんでしょう」

「ああ、北原さん、妊娠していませんよ。変だな、体温計、壊れていませんか……」

医師の言葉が終らないうちに、知子は薄いカーテンで区切られただけの狭い診察室で泣き出していた。

泣いたりするのは、うんと久しぶりだった。こんなところで泣いたりしてはいけない